

## 精神発達遅滞児の治療教育過程の研究

### II. J児の自転車遊びについての一考察

板野 昌儀 (愛育養護学校)

#### I. はじめに

子どもの治療教育に携わる者として、子どもとの親しさや信頼感を深めることは、基本的な前提条件である。そして、子どもと共有する時間・空間をどれだけ確かなものとしていけるかが出発点である。このことは、子どもの側でとらえる<安心できる距離>として表現される。

この距離は、近づくことによって親しさや信頼感を表現する場合と、反対に安心して離れることで表現する場合がある。したがって、物理的な距離としては、単一に測定するものではなく、ひとり一人の子どもの側で意味をもつ主観的な距離感である。

<安心できる距離>は、対人関係を直接に表現するが、対人関係のみに表われるのではなく、もとの距離や位相関係についても、ひとり一人の子どもにより独自の距離感と意味をもって表われる。

この主観的で独自の距離感とは、子どもの内的世界の表現として観察可能なものであり、そこに表現されている独自の意味への接近は、子どもの内的世界への接近の手がかりとなる。

以下J児の自転車遊びをめぐる、J児が展開した、もとの距離、位相関係について考察をすすめる。

#### II. 事例 (J児 男子 小学部一年)

J児は、4歳から家庭指導グループに週二日通い、5歳から養護学校幼稚部に継続したケースである。ここでは、小学部一年時の記録をもとに考察する。したがって、これまでの経過について、簡単にふれておきたい。

4歳で家庭指導グループに来て、J児にとっては、はじめての集団であり、同時に家の近くの幼稚園にも通いはじめる。ことばと対人関係に遅れがあり、発声はあるが、ことばにはならず、遊びもなかなか始まらない状態であった。生活面での理解や大人からのことばがけには

理解があり、幼稚園やその後の学校生活でも日常的なことは、スムーズである。発声に関しては、進展が少なく、声の種類と動作に伴う発声は多くみられるようになっていた。

J児の遊びの特徴は、ひとつの遊びが長く持続することである。数ヶ月、あるいは1~2年と続き、繰り返して表われる。4歳時にみられた特徴的な遊びは、プラレール(レールをつないで電車を走らせる)遊び、数字かき、自転車に乗せてもらうことである<sup>1)</sup>。5歳時には、プラレールが少なくなり、他は持続する。数字は、地面や紙により大胆に書く。5歳時後半から保育者の配慮で、遊びの中におんぶやくすぐりっなどを多くし、人との親密な関係を発展させようとする。そのため散歩にもよく出かける。園内のJ児の遊びよりも直接身体にふれ合う経験を多くする。この時期、特に人との関係に重点を置いた保育を試みる。

J児の対人関係の特徴は、遊びの中で、思うように出来なかったり、大人に要求が伝わらなかったりすると、かんしゃくを起し、顔を真赤にして怒ることである。時には、大人の指や本児の指を強く噛む。一方、子どもに対しては、避ける傾向がある。手をあげたり、向って走って来る子どもに対しては、相手に攻撃の意志がなくても急いで体をかわす。これらの特徴は、状況の理解とことばの理解がすすむにしたがって減少している。ただ、ことばに依存しすぎると、説明が複雑になり、理解がくい違うことがある。それでも以前のようなかんしゃくや他児を避ける傾向は減少している。

以上の経過を経てJ児は、小学部に入学する。そして、自発的な活動の中でJ児は、再び自転車遊びに取り組む。

自転車への興味は、4歳後半からみられ、すでに一人で乗れる下地はあったが、入学して一ヶ月で完全に一人で乗りこなすまでになる。しかし、J児は、これ以前も以後も大人に乗せてもらうことを強く要求する。J児がハンドルを握り、後ろから大人がハンドルを支えて動くというスタイルが長く続く。この姿勢で大人に体重をあ

づけ、タイヤの跡や車輪の回転に見入りながら、自分で方向を決めて庭をまわるのである。大人の後ろに乗って大人の身体をハンドルがわりに方向が決められるようになる。J児の自転車遊びは、さらにダイナミックな動きへと展開する。4、5歳のころから、盛り土の上から下ったり、固定遊具、植え込みの間を通過したりなど、難しいところ、変化に富んだところを選ぶ傾向があり、また、まわる方向が定まると同じコースを何度も要求することはあったが、自転車遊びのスキルを楽しむこと以上には、その意味を見出せなかった。6歳ごろから次第にコース上の目標物（固定遊具や植え込みその他庭に出ている遊具、玩具類など）が増え、目標物のどこを通るかが自転車遊びの中心となっていく。

### 1. 記録1

着替えて私の手を取り庭へ出る。昨日と今日、雨の中を朝から自転車遊びを始める。自転車のカゴに入っていた人形を砂場の前に置く。私に自転車をこがせ、Jは後ろに乗って走る。人形を指さしたり、マンホールを指さしたりしてコースを指示する。他児の泥んこ遊びのスコップを取ってきて自転車の前に置き、スコップの柄の上を示す。その上を自転車で通過する。

コースは、庭を左まわりに定まってくる。目標物は、盛り土の頂上→タイコ橋→マンホール→砂場の人形→水たまり→ジャングルジム→ブランコ→盛り土へとつながる。目標物の中で人形だけは移動可能なもので、Jは、人形をコースにそって、水たまり、ジャングルジム前へと移動させては、私に自転車をこがせて走る。人形は、マンホールを除いて、ほぼ庭を一周する。

各目標物のどこを通過するかは、細かい指示が、私の背後のJから指さしや、身体の動きのサインとして伝わってくる。人形については、「前」、「後」。落葉、枯枝、スコップ、皿については、「踏む」。ジャングルジム、ブランコの支柱基石については、「境界」。盛り土については、「登る位置」。タイコ橋については、「右」「左」「下」。マンホールについては、「中央」「周辺」「踏まない（近づかない）」などである。

このようにして一日を過ごすのであるが、この日の自転車遊びは、典型的な遊び方を示した。目標物の数は、日によって多少変化するが、このような自転車を使って、ものとの距離感、位置関係に集中する遊びは、その後も続き、二年以上になる。

一定のコースをたどって庭をまわっていると、過去のブラレールや数字かきを想起させられる。一度レールに

乗ると、あるいは、数字の序列性にとらわれると、その中をいつまでもまわりつづける。

また、ブラレールや数字かきの中にも、ものとの距離感、位置関係に思い至るところがある。

たとえば、53年記録 a

レールをどの様に並べても構わないし、電車をどの様に走らせても気にしないが、大きな白い橋だけ三つだけは、一定の場所の青いブラレールをはさむように並べなければ気がすまない。

当時のJとしては、柔軟に大人の働きかけを受け入れているが、大きな三つの白い橋げたは、走る電車との間で特別な位置を占めていたと思われる。

53年記録 b

鉄橋の上で必ず列車の連結器をレールに押しつけ再び走らせる。

53年記録 c

ブランコで私の膝に座り、電車（一台）を向いの席に乗せる。電池が入っていないので、片方の車輪が浮く。席の板が斜めになっているところに電車を置くと、両輪とも板につき、電車は安定して見える。Jは、満足したように電車をはなす。ブランコを降りる。

54年記録 d

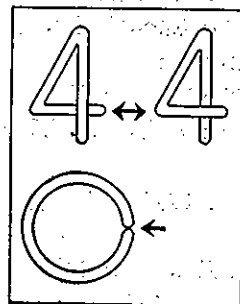
（地面に大人に数字をかかせながら）数字の中でも4といった交点に注目しているようだ。何度も書き直すと、その度毎に上になる線が代わるのが気になるらしい。○（丸）を書いても最後の部分が、土で盛り上がっていると、それが気になるようである。（下図参照）

これは、Jにとって、隠れる線、つながらない線が気になっていたと考えられる。

ブラレールや数字かきは、庭を走りまわる自転車遊びとは、一見、非連続な遊びに見えるが、Jにとっては、内的世界の中で、後に続く、ものとの距離感、位置関係の問題として感じていたのではないだろうか。

Jの遊びは、単純な活動という印象を受ける。特に自転車遊びは、一度コースが出来ると、これを見守る人には気楽な遊びに見える。しかし、自転車を運転する人には、一種の緊張感がある。

問題は、Jの要求する距離感、位置関係にある。Jの要求は、<目標物には、可能な限り近づくこと。そし



て、踏み越えるもの以外は、目標物に接触しないこと>なのである。この要求は、Jの自転車遊びのルールであり、これを無視すると、自転車に乗せてもらっていてもJはつまらなくなり、運転している大人も苦痛になる。Jは、目標物を極限(limit)とし、自転車を無限に近づけていく。そして、目標物を通過し、ふり返って今まで通り目標物があると、たいへんよろこぶ。これは、ものとの間に緊張関係をつくり出す遊びと言える。

## 2. 記録2

毎日母親と手をつないで登校するが、今日は母親の後ろにくっついて登校する。家から文字積木を一つお腹に入れてもってくる。着替えて、自転車をはじめ。もってきた積木を庭に立て、目標物とする。庭を大きくまわっている間に他児の遊びにまぎれて、積木がどこかへいってしまう。Jは、おもちゃ箱から人形をとってきて代わりに置く。

他児が掃除をしているそばを通り、竹ぼうきでたたかれる。なぐさめて再び自転車をはじめ。

見失った積木がみつかり、再び立てる。私が提案してJが一人で自転車に乗り2周する。

家庭ではJは、大事なもの、気に入っているものを、お腹とシャツの間に入れてもっていることがあると、母親が話してくれる。とてもかわいい仕度である。家からもってきた積木は、5つくらいになった。

大事なもの、気に入っているものを自転車遊びの中で目標物にするのは、どういうことを意味するのか、興味深い出来事である。

自転車遊びは、Jにとって目標物と緊張関係をつくる遊びであると、先に考察したが、これは、目標物を拒否しているのではなく、目標物に対して、大事なもの、気に入っているものと同等の価値を与えていることを示すものではないだろうか。

大事なもの、気に入っているものなど、対象物を緊張関係の中でとらえ直すことは、対象物との関係を確かなものとする試みと考えることができる。

このような欲求が、Jの内的世界にあると考えるならば、自転車遊びの目標物との距離感、位置関係に表現されている内容は、対象物との関係に不確かさが潜在していることを意味しているのではないだろうか。

## 3. 記録3

マンホールのそばに目標物を置き、目標物のそばに指で何度も線を引き、私を指さして、何か言いながら見

る。そこを自転車で通るようにとの合図である。この動作を、目標物を置く度に5回くらい確かめるように繰り返す。

目標物は、最初は積木、次に小さい人形、自動車、飛行機、大きい人形と代えていく。庭を数周しては、目標物を取り代えていく。

Jの人との距離については、特に抱っこやおんぶ、くすぐりっこなど直接身体に触れ合う遊びは、あまり長く続かず、甘え方もどこかぎこちなさを感じる。大人、子どもを限らず、相手からの接近には、戸惑いやよけようとする動作がみられる。

目標物のどこを通るかを、私に示すために自転車を降り、指さし、声などで伝える。この要求は明確で、私にははっきりと伝わってくる。しかし、Jには相手に伝わっているという実感がもてないのか、何度も繰り返すことがある。この傾向は、二学期に特に多くみられた。

このようなやりとりには、Jの、ものとの距離感、位置関係と同様、人についても、相手との関係に何か不確かな部分を残していることを感じさせられる。

Jの自転車遊びは、ものや人との関係の不確かさを表現しており、これをより確かな関係にしようとする試みが、なされていたのではないだろうか。

## III. おわりに

このケースは、現在継続中であり、小学部になってからの自転車遊びは、すでに二年以上続いている。

Jの、ものに対する距離感、人に対する距離感、Jの内的世界で統合され、Jの全体像を形成していると考えられる。

そして、ものとの距離感、位置関係に集中する遊びを通して、対象物との関係で確かなものを蓄積していくなれば、対象物を認識する上で、Jにとって主観的な基点、中心となるものが生まれてくるのではないだろうか。

このことが、人との距離感にも影響を与えていくと思う。

Jの小学部一年の一年間をふり返って、母親から「私との付き合いの中で、だいぶ自然に付き合える部分が、多くなってきました。その分だけ、私が楽になってきました」と報告があった。

注1 家庭指導グループでのJ児の一年間については、柴崎正行により「遅滞児の遊びにみられた表現行為」としてまとめられ、1981年日本保育学会第34回大会で報告されている。